

母六夜

大岡昇平

新潮社版



© 1971 Shōhei Ōoka Printed in Japan

母六夜

昭和四十六年七月一日印刷
昭和四十六年七月五日発行

著者・大岡昇平

発行者・佐藤亮一

発行所・株式会社新潮社

郵便番号・一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話・東京二六〇局一一一一

振替・東京八〇八

印刷・図書印刷株式会社

製本・大進堂製本

定価六五〇円

落丁・乱丁本はお取替えします

大岡昇平短編集 母六夜 目次

面
影

81

雅
歌

45

焚
火

21

母
六
夜

7

叔	水	路	情
母		上	事
187	169	121	103

装幀者 赤坂三好

母
六
夜

母
六
夜

第一夜

小学五年生の秋、原因不明の熱を出して、近郊外の病院に、入院したことがあった。生れてはじめて両親の許を離れ、一人で寝るのである。西洋建の病室の白い壁も、上下に開閉する窓も、ベッドもみな珍しかったが、夜はなんともいえず淋しかった。

附添看護婦が食堂へ行く時、サイドテーブルの下に入れてある卵を、黙って取り出すその態度が、とてもいやだった。大人に馬鹿にされるのが、苦になり出した頃だった。

母は毎日見舞ってくれた。都心に勤先を持つ父を送り出し、家の中の掃除をすませてから出て来るのだから、病院へ着くのは十一時頃になる。

明るい窓を背にして坐り、私に昼食を食べさせてくれた。
「どうですか」

といいながら、ベッドの傍に立つと、胸が近くなる。母はその頃はまだ若く、他所^{よそ}行きの着物に、帯を胸高にしめたような感じで、なかなか美しかった。娘々^{むすめむすめ}していた、とあとになって思い出された。

下には弟が二人生れていたし、私は母と向い合って、こんなに長い間、話をする機会がなくなっていた。父は見舞ってくれなかった。

毎日新しい本を買って来てくれるのも、うれしかった。駅前の本屋で買った本を胸にかかえて、広場を横切る母の姿を覚えていようような気がするのだが、そこに私がいるわけではないから、夢で見たか、もしくはそんな風にいく度も空想しているうちに、見たような気になってしまったに違いない。

少年雑誌も立川文庫もすぐ読み尽してしまった。親類の学生に教えられて、その頃出はじめた高級な童話雑誌を買って来てくれた。

その中の一つの話が私に強い印象を与えた。夕日を追っかける少年の話である。沈む太陽を惜しんで、少年は野越え山越え追って行く。太陽はどんどん沈んで行くので、少年は駆け出す。その速度が地球の自転の速度を追いつくと、太陽はゆっくり西の空から昇り始める。しかし少年が疲れ満ちて、道傍の石に腰をかけると、太陽はすぐ沈み出し、あたりに夕方の赤い光が拡がって来る。少年はまた立ち上り、駆け出す。太陽は昇り始める。少年は休む。太陽はまるで重しでも附いているかのように、地平線の下に落ち込んでしまう。

少年は野越え山越え、どこまでも駆けて行った。「少年の行方は誰も知らない」とその陰気な童話は結んであった。

夢を見た。なにか地球ぐらい大きくて重いものの横腹に、疣いぼのようなものが一つついている。それを二本の指でつまんで、持ち上げようとしているのだった。持ち上がらないとはわかっていても、持ち上げなければならぬので、私はもがいていた。

入院して間もなく熱がよく出た頃だった。私の病気はいまなら小児結核といわれたに違いない。病名がはっきりしないままに、三カ月近く入院していた。

別の童話雑誌では、一つの挿絵が私を惹きつけた。花の精かなんかが、花の冠をかぶり、片手に豎琴を持って、草の上で踊っている姿だった。透き通った衣の下の肢体の線が、はっきり描かれてあった。私の眼は二つの内腿の合わさった部分から離れることが出来なかった。

童話はすぐ読んでしまったが、その挿絵だけは、何度も開けて、眺めずにいられなかった。その絵を見ている時、母が入って来た。すぐ本を胸の蒲団の上に伏せたが、狼狽をかくせなかったに違いない。本を閉じて、わきへおくというような智慧が浮ばなかった。

母が「どうですか」とたずね、リンゴかなんかむいてくれる間、本はそこに伏せられたままだった。母は皿を私に渡そうとしてそれをどけ、絵を見てしまった。母はなにもいわなかった。

夢を見た。おそろしいものに追われて、私は夜の中を逃げていた。行く手の暗い空から、電線が地面すれすれまで下って来るので、私は縄飛びの要領で、それを飛び越さねばならなかった。

私はもがき苦しみながら、次から次へと、絶えず私の足許目掛けて下って来る電線を飛び越えながら、逃げて行った。

私を追っかけてくるこわいものも、この電線を飛び越えなければならないはずだ、と私は思った。振り返ると、駅前広場のようなところに、電線がいっぱいに拡がって、その化物の方へ向って行く。化物は老婆のように背をかがめ、私をねらうような姿勢をしていた。私から目を離さず、足だけ機械的に動かして、次から次へと降りて来る電線を飛び越していた。

眼が覚めた。雨漏りのしみににじみ出た病院の天井が、薄暗い光に照らし出されて、私の上にあった。あれはたしかに母であった。なぜ母があんなこわい老婆にならないのか、なぜ私を追って来るのか。なぜ私がこんな夢を見なければならぬのか、さっぱりわからず、私は苦しんでいた。

第二夜

夢の中で、私は自殺しようとしていた。汚濁に充ちた世の中に、あと五年と生きている気はしなかった。せいぜい二十三まででたくさんだ。その年になったら、私は自殺するつもりだったのに、夢の中では、いまずぐ自殺しようとしているのだった。

崖の上に立つと、遙か下に海が見下ろせた。青い水は透き通り、深い底の緑の岩層が、放射線

状の縞を描いているのが、苦しいくらい、はっきり見えた。私はそこへ飛びこまねばならないのだった。

しかし水はあまりにも澄み、岩の緑の色はあまりにも美しかった。そこは入江になっていて、水を取り巻く山々も青く、私を見守るように、静まり返っている。海と山はあまりにも美しかったので、自殺するのがためらわれるのだった。

私に乗せた舟は沖を目指していた。水平線に一つの島が軍艦のように浮んでいた。ピタゴラスの定理の例題にある直角三角形の形をした、小さな離れ島だった。その島は赤や黄色や緑の岩で、こね合せたように、出来上っていた。

そのごつごつした形と、刺激的な色が、私には堪え難くいやだった。私はもう自殺するつもりはないのに、島はどんどん近づいて来るのだった。

第三夜

母が二十三歳の時死んだ。母の死体を入れる白木の寝棺が、奥の十二畳に運び込まれた時、父は、

「どれ、わしがちょっとためしてみよ」

といいながら、おどけた調子で、棺の中に入り、仰向けに寝て、

「ええあんばいや」

といった。私はいやな気がした。

その父も母より五年永く生きていただけだった。母の着物が一枚残っていた。母が死んだ時、全部形見分けしてしまったはずだったのに、その紬の普段着だけ残っていた。父が母の着物を持つていたことは、誰も知らなかった。

むかし私を病院に見舞ってくれた時、母が着ていたものと、私は気がついた。

或る日、花子にその着物を見せると、

「あたし着てみるわ」

といって、帯を解きはじめたのだった。花子の長襦袢は、私が見たこともないような派手なものだった。（私はそれまでに母の長襦袢しか見たことはなかったから）その上に母の地味な紬を重ね、桃色の腰紐を結ぶと、花子は美しくなった。

「あなたのお母さんになってあげる」

といいながら、花子は胸を寄せて来た。その日から、私は花子から離れられなくなってしまったのだった。